

祇園精舎語りの秘曲性

——付 山口県立山口図書館蔵『小秘事』影印——

鈴 木 孝 庸

一 はじめに

私は、平家物語の文章表現の形成（創造）に関わることを、平家語りの具体相である（平曲／平家琵琶）と平曲譜本を材料にして考察を続けている。その中間報告が、『平曲と平家物語』（『新編公家文学』 二〇〇七、知泉書館）である。また、そのための資料（平曲譜本、平曲指南書、當道盲人関係資料など）調査も併行し、全体的な報告は科研費報告書「平曲伝承資料の基礎的研究」として提出してきた。個別の平曲譜本の検討は、豊川本『平家物語』、高田図書館蔵『琵琶平家物語』、宮崎文庫記念館蔵『平家物語』など、平曲指南書は、東大蔵『平曲秘書』など、當道資料は、『當道要抄（當道要集）』『當道大記録』『當道略記』『當道拾要録』『四宮殿傳記』『當道』古式目』などを検討し、いずれも本文紹介を行った。

本稿は、平曲譜本『平家吟譜』（さんが）を影印刊行したことが契機となっている。『平家吟譜』は、医者であり茶人でもあった岡村玄川（げんせ）（晴眼者）が、豊田雅一検校などの演誦教授をもとにして元文二年（一七三七）に完成した前田流の譜本であるが、明治末以降その完本が所在不明となり、断片の紹介がいくつかあるのみで経過していた。しかし二〇〇三年に私は、富山県黒部市の私立・宮崎文庫記念館蔵『平家物語』十二冊が平曲譜本であり、そ

の墨譜はかせ（音高や声の扱い方に關する指示記号）から判断して『平家吟譜』の完本であると判定して、村上光徳とともに『平家吟譜—宮崎文庫記念館蔵 平家物語—』（二〇〇七、瑞木書房みづき）として刊行した。

この影印本の解題に、私は現在判明している『吟譜』系の譜本を列挙したのだが、刊行後、山口県立山口図書館蔵「小秘事」が、「武彗豊田檢校傳之」と記されていることを思い出した。この譜本は、「延喜聖帝（マヤ）」と「祇園精舎」の二句だけを特別扱いにしたもので、国語国文学研究史大成『平家物語』（一九六〇。三省堂）の譜本目録にあげられてあり、奥村三雄の検討（後掲）もあり、一九八六年八月十二日と一九八七年二月十二日に私も現物を調査し撮影も許されていたのである。

あらためて墨譜等を検討したところでは、この『小秘事』は『吟譜』の類ではなく、奥村も言うように波多野流の譜本とみるべきであると判断した。従って前記解題の『吟譜』系譜本目録を補訂する必要はなくなつた。しかし、この検討を通じて、ささやかなことではあるが、気が付いたり考えたりしたことがある。特に平曲の「秘事」は、大秘事三句（「宗論しゅうろん」「劍之卷つるぎのまき」「鏡之卷かがみのまき」）、小秘事二句（「祇園精舎」「延喜聖代えんぎせいだい」）。但し、波多野流では「善光寺炎上ぜんこうじえんじょう」を加えて小秘事を三句とする）であるが、藝能伝授に際して特別な扱いがなされて来た。その「秘」たる所以はどのようなところにあるのか、また、譜本上で具体的にどのようなように記されているのかという問題である。これについては、大秘事小秘事（さらには「謹頂五句」等も）全体を見渡しての検討立論が望ましいのであるが、どこからどのように考えるべきか見通しが立たない。そこで手始めに、平曲小秘事の「延喜聖代」「祇園精舎」二句のうち、「祇園精舎」のみを取り上げることとし、「延喜聖代」をはじめとする他の秘曲についての検討は、今後の課題としたい。なお本稿の表題は厳密に言うなら「小秘事」性とすべきであろうが、一般的な呼称として「秘曲」を用いることにした。

二 平家物語の「祇園精舎」

本稿は、平曲の「祇園精舎」を平曲譜本を材料にして検討するのだが、その前に、譜本ではなく平家物語一般の「祇園精舎」について、ごく簡単に触れておきたい。本文を概観した結果、所謂「広本系」と「略本系」とに大別されるようである。^{注1}「広本系」間では微妙な本文異同が認められるが、延慶本の本文を代表的なものとし、「略本系」は福島県歴史資料館本で代表させることにする。説明の都合上、本文を適宜句切つて①②③…とし、本文の異なる箇所（有るか無いかだが）は、 で表示して i ii iii …とした。

広本系	略本系	平曲譜本（平家正節 ^{まふせ} ）
<p>① 祇園精舎、鐘、聲 諸行無常、響アリ</p> <p>沙羅雙樹、花、色 盛者必衰、理、顯</p>	<p>祇園精舎の鐘のこゑ、諸行無常のひゞきあり、</p> <p>沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす、</p>	<p>中音 祇園精舎のかねのこゑ 諸行無常のひゞき有り</p> <p>沙羅雙樹の花の色 盛者必衰のことわりをあらはす</p>
<p>② 驕人不久、春、夜、夢、尚、長</p> <p>猛者、終、滅、偏、風、前、塵、不留</p>	<p>をこれる人も久しからず、た、春の夜の夢のことし、</p> <p>猛きものも遂にはほろひぬ、ひとへに風の前の塵におなし、</p>	<p>初重 おこれる者久しかアらず たゞ春の夜の夢のことし</p> <p>重初重 たけき人も終には亡びぬ ひとへに風の前のちりに同し</p>
<p>③ 遠、訪、異、朝、者</p> <p>秦、趙、高、漢、王、莽</p> <p>梁、周、異、唐、祿、山</p>	<p>遠く異朝をとふらへは</p> <p>秦の趙高、漢の王莽、</p> <p>梁の周伊、唐の祿山、</p>	<p>重初重 遠く異朝をとふらうに</p> <p>秦の趙高 漢の王莽</p> <p>梁の朱異 唐の祿山</p>

是等^ハ皆^ハ
舊主^{キウシュ}先皇^{ケンノウ} 政^{マツリゴト} 不^スレ從^{シカハ}

民間^{ミンケン} 愁^{ウレヒ}

世^ヨ 乱^ヲ 不知^ラ シカハ
不^メレ久^シシテ 滅^{ニキ}

④ 近^ツ 尋^シ 我朝^{ワカサト} 者^ヲ

承平^{ケイヘイ} 將門^{シヤウモン} 天慶^{テンケイ} 純友^{ジュンユウ}
康和^{カウワ} 義親^{ギシン} 平治^{ヘイシ} 信賴^{シンライ}
驕^{ヨウ} 心^{シン} 猛事^{マウジ}

取^{トリ}々^々 有^アケレトモ
遂^{ツイ} 滅^{ヘトヒニキ}

③ 縦^ヒ 人事^{ニジジ} 詐^{イツ} ト云^{ハル}

天道^{テンダウ} 詐^{イツ} カタキ者^カ哉^カ
王^{レイ} 麗^{レイ} ナル 猶^{ナラ} 如^カ 此^{コト}

② 聞^ク 近^ク

大政^{ダイセイ} 大臣^{ダイジン} 平清盛^{ヘイキヨウ} 入道^{ニョウドウ} 法名^{ホウメイ} 淨海^{ジョウカイ}
申^{マウ} シケル人^{ニノリ} 有^ア 様^{サマ}
傳承^{デンジョウ} 心^{シン} モ 詞^ジ モ 及^キ ハレネ

是等はみな

舊主先皇の政にも随はず、
たのしみをきはめ、諫をもおもひ入す、
天下の乱ん事をさとらずして

民間のうれふる所をしらずしかば、
久しからずしてほろひにしものともな
り、

近く本朝をうかゝふに、

承平の將門 天慶の純友
康和の義親 平治の信賴

是等は たけき心も をこれる事も
皆とりとりにこそ有しか

ii

iii

ちかくは

六波羅の入道 前大政大臣 平朝臣
清盛公と申し人の有さま、
傳へ承るこそ 心もこと葉もよはれ
ね、

是等は皆

舊主先皇の政にも しイたがはず たの
しみをきわめ いさめをもおもひ入れず
天下の乱れん事をさとらずして 民間
の愁うる所をしらざつしかば

久しからずして亡じにし者どもなり

位口説^{くらぐい} 近く本朝をうかゝうに

承平の將門 天慶の純友
康和の義親 平治の信賴

是等は おごれる事も たけき心も
皆とりくゝなりしかども

ii

iii

まちかくは

六はらの入道 前の太政大臣 平の朝臣
清盛公と 下ケ 申しし人の有様
傳へうけたまはるこそ 心もことばも及
ばれね

<p>⑧ 彼、先祖尋<small>シメハ</small></p>	<p>其先祖をたつぬれば、</p>	<p>〔三〕重甲<small>シメカウ</small> 其の先祖を尋ぬれば</p>
<p>桓武天皇第五皇子 一品式部卿</p>	<p>桓武天皇第五の皇子 一品式部卿葛原</p>	<p>上<small>シメカウ</small> くわんてんてんごうごうごの皇子</p>
<p>葛原親王 九代ノ後胤</p>	<p>親王 九代の後嗣、</p>	<p>甲 一品式部卿 正 葛原の親王 九代の後胤</p>
<p>讚岐守正盛孫</p>	<p>讚岐守正盛が孫、</p>	<p>後胤 下 讚岐の守正盛が孫</p>
<p>形部卿忠盛朝臣 嫡男也</p>	<p>刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり、</p>	<p>刑部卿忠盛の朝臣の嫡男なり</p>
<p>彼、親王、御子高見ノ王 無官無位</p>	<p>彼親王の御子 高視王 無官無位にして</p>	<p>彼の親王の御子 高視の王 無官無位にして 中ユリ<small>ナカユリ</small> うせたまひぬ</p>
<p>シテ失給ケリ</p>	<p>うせ給ひぬ、</p>	<p>其の御子 高望の王の時</p>
<p>其御子 高望親王、御時</p>	<p>其御子 高望王のとき、</p>	<p>iv はじめて平の姓をたまはつて</p>
<p>寛平二年五月十二日</p>	<p>始て平の姓を給て、上総介になり給しよ</p>	<p>に成給ひしより以来 忽ちに 王氏を出</p>
<p>初平、朝臣、姓賜テ 上総介</p>	<p>り</p>	<p>でて 人臣につらなる</p>
<p>成給シヨリ以来</p>	<p>忽に王氏をいて、人臣につらなる、</p>	<p>〔初重〕 其の子 鎮守府の將軍義茂 後に</p>
<p>忽、王氏出 人臣烈</p>	<p>其子 鎮守府將軍良茂 後には國香とあらたむ、</p>	<p>は國香と改む</p>
<p>其子鎮守符將軍良望後 常陸</p>	<p>國香より</p>	<p>v 正盛に至るまで六代は</p>
<p>大極國香 改</p>	<p>諸國の受領たりしかども、</p>	<p>諸國の受領たりしかども</p>
<p>貞盛 維衡 正度 正衡</p>	<p>正盛に至るまで 六代は</p>	<p>殿上の仙籍をば いまだゆるされず。</p>
<p>正盛 至マテ六代</p>	<p>諸國の受領たりト云、トモ</p>	
<p>未殿上仙藉不聴</p>	<p>殿上の仙籍をは いまたゆるされず</p>	

これを簡単にまとめると次の通りである。

- (a) 第一主題（諸行無常）第二主題（盛者必衰）の比喩的提示。
- (b) 第二主題（盛者必衰）の比喩的補足。
- (c) 第二主題の例証。異朝（中国）の先例を列挙し儒教的臣下論を付加。
- (d) 第二主題の例証。本朝（日本）の先例を列挙。
- (e) 第三主題（といふべきか。天道論。君臣論。）を提示し儒教的臣下論を付加。
- (f) 第二・第三主題に関わる（「歴史」上の）最近最大の例証と云うべき平清盛の紹介。
- (g) 系譜語りの(1) —— 清盛の出自。
- (h) 系譜語りの(2) —— 桓武平氏の誕生から清盛の祖父・正盛まで（御先祖の略史）。

「主題」が提示され「例証」が挙げられ、平清盛に集約されたところから「物語」が始まる。広本系のテキストと略本系のテキストとは、何カ所かの出入り(i ii iii…)がある。現在の本文研究では、一方系本文よりも延慶本は古い傾向にあると考えられている。そのことを視野に入れ、それぞれの異同を判断すると、次の通りである。

- i 広本系は、iがなくてもこれなりに対句的と見ることも可能か。略本系は、対句の変化と認められる。
- ii 略本系は、(c)と(d)の対応(対)が、未完結になっている。(福島本は終止とみることも可能だが)
- iii 広本系は君主(王権)に関わる要素あり。略本系は要素なし。
- iv 広本系は記録性あり。略本系は後退する。
- v 広本系は丁寧な系譜語り(系譜語りの本道といふべきか)。略本系は後退する。ま

すなわち、iは略本系の増補改変、ii iii iv vは略本系の削除省略と見ることができる。

平家物語の「祇園精舎」の初期段階は、

イ 普遍的な真理としての「諸行無常観」と、

ロ 対象を限定する「盛者必衰観」に、

ハ 儒教的な「臣下論」に「君主論」が付加され、

ニ 例証を列挙した上で、平清盛を「主人公」として紹介し、

ホ 「主人公」の系譜を確かな事実として紹介する、

であったものが、

⑱ 「論評性」の後退

⑲ 「君主論」的傾向の削除

⑳ 「系譜語り」の簡素化

によって、

㉑ 盛者必衰観の集約・強調

㉒ 清盛への集中照射

という傾向に動いたと考えられる。

ここまでは、本稿の前置きである。平家物語の「祇園精舎」を、現在想像し得る古い方から新しい方へとその変化を見たのだが、この先は、年時の新しい資料から、古い年時のものを見て、遡るような形で見ることになる。

三 主要検討対象の確認——平曲譜本

この考察で材料とする平曲譜本を紹介する。

平曲譜本は、江戸時代になってから作成されるようになったと考えられている。平家物語の成立が十三世紀の前半、語りの開始を遅く見て十三世紀末と考えると、譜本の成立は約三百年遅れることになる。

墨譜の形、流派に関わる記事をもとに、譜本を分類すると、流派は波多野流または前田流である。また、墨譜による判断を加えるなら、古い段階の墨譜は、直線の傾き具合や線の曲がり具合によってことばの抑揚や、一音一音の旋律的な動かし具合（節回し）を表示しているのに対し、新しい墨譜は、抑揚・節回しを、文字ないし文字的な記号によって表示している。

それぞれの譜本群の代表的な譜本を次にあげる。㊸と㊹以外は、一応『平家物語』の本文が一通り揃っている。

- 年記のあるものとして最古の譜本 …… 高橋貞一旧蔵、貞享四年（一六八七）書写本。
ただし五句（火燧合戦、忠度都落、青山、福原落、宇佐行幸）のみ。前田流譜本。…… 「祇園精舎」なし。
- 『秦音曲鈔』…… 享保十四年（二七二九）の跋文あり。波多野流譜本。
…… 「祇園精舎」は本文のみで、曲節・墨譜なし。
- ㊸ 『小秘事』（山口県立山）…… 「延喜聖帝」と「祇園精舎」の二句のみ。波多野流譜本。
- ㊹ 『平家吟譜』…… 享保十六年（一七三二）の奥書あり。前田流譜本。
『平家吟譜』（宮崎県平家物館蔵）…… 成立らしいが、完本現存せず。^{注4}
- 『平家吟譜』…… 元文二年（一七三七）成立らしいが、完本現存せず。^{注4}
- ㊺ 『平曲吟譜 灌頂卷』（青森県立）…… 前田流譜本。…… 「祇園精舎」あり。

○ 『平家物語』 波多野流譜本 …東大國語研究室本は、明和六、七年（一七六九〜七〇）書写。

㉔ 『秦野流 小秘事』（奥村） …「祇園精舎」「善光寺炎上」「延喜聖代」の三句。

㉕ 『波多野流 小秘事』（京都府立総合資料館蔵） …「祇園精舎」「善光寺炎上」「延喜聖代」の三句。

㉖ 『平家物語』（早大演劇博物館蔵） 豊川勾當所持本 …この系統の譜本の成立年時は不明。墨譜の形が正節に近いことと、正節譜が後筆で書き込まれているので、正節譜より先行する譜本とみて、この位置にした。前田流譜本。

㉗ 『平家正節』：安永五年（二七七六）成立。前田流譜本。

○ 『平語小曲』：寛政十二年（二八〇〇）刊。…聞かせどころを抜粋したもの。前田流譜本。「祇園精

舎」なし。

㉘ 『平家物語 前田流』（昭和女子大学蔵） …成立年時不明。墨譜の形から推測して、初期の譜本か。

以下の考察では、ここにあげた ㉔㉕㉖㉗㉘ を材料とする。しかし、現在残されている平曲は、㉔の『平家正節』によるものであり、墨譜の意味も『平家正節』によらなければわからない。従って、まずは『平家正節』の「祇園精舎」を紹介し、問題の所在を提示したい。

四 『平家正節』 「祇園精舎」のテキストと曲節

『平家正節』の「祇園精舎」のテキストと曲節付けは、前掲の広本系と略本系の「祇園精舎」の対照表の下段に紹介してある。

・テキストは、略本系のテキストとまったく同じである。

・曲節 miki kakemono edupa. の名称だけを、改めて取り出してみると、
 〈中音〉^{ちゆうおん} — 〈初重〉^{しよじゆう} — 〈重初重〉^{かさね} — 〈重初重〉 — 〈位口説〉^{くわいぐせき} — 〈下ケ〉^{さげ} — 〈三重〉^{さんじゆう} — 〈下り〉^{くだり} — 〈初重〉
 である。

・曲節の配分が、テキストの小さなまとまりにほぼ対応している。細部にこだわって言うならば、

④ 主題提示と例証の部分と

⑤ 系譜語りの部分とで、

対応関係に変化があり、④の方がテキストとの密着度が強い。

① 〈中音〉 第一主題（諸行無常）第二主題（盛者必衰）の提示。

② 〈初重〉〈重初重〉 第二主題（盛者必衰）の補足。

③ 〈重初重〉 第二主題の例証。異朝（中国）の先例を列挙し儒教的臣下論を付加。

④ 〈位口説〉 第二主題の例証。本朝（日本）の先例を列挙。

⑤ … 〈下ケ〉 第二に關わる最近最大の例証。平清盛の紹介。

⑥ 〈三重〉〈下り〉 系譜語りの(1) — 清盛の出自。

⑦ … 〈初重〉 系譜語りの(2) — 桓武平氏の誕生から清盛の祖父・正盛まで（御先祖の略史）。

なお、前掲 ④、⑤ の諸譜本の祇園精舎のテキストは、すべて同一とみてよい。この先は、テキストの間

題ではなく曲節と墨譜を問題にすることになる。

五 『平家正節』『祇園精舎』の特徴と問題点

「祇園精舎」は、平曲の伝授に際して特別扱い（秘伝）の一句である。「小秘事」と称される。内容的に重大なことを取り上げていることが、秘伝とされる所以であるが、音楽的にも特別なものがある。

- ① 語り出しの曲節が〈中音〉である。
- ② 〈中音〉を構成する小部分の一ノ声、二ノ声、中ユリの配分と表現に特徴がある。
- ③ 〈初重〉―〈重初重〉―〈重初重〉と、同じ曲節が連続する。
- ④ 〈口説〉も特別な〈位口説〉である。

右の四点の特色は、他の平曲一般と異なることを説明する。

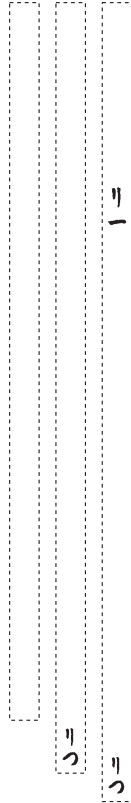
『平家正節』の引用に際して、墨譜の表示は、西川企画・西川勉氏作成のものによった。

- ① について。…『平家正節』は『平家物語』を二百に句切って語るのだが、語りだしの原則は〈口説〉である。一八七句が〈口説〉から。〈中音〉を開始曲節とするのは一〇句。〈拾ひらひい〉が二句。〈初重〉が一句。

- ② について。…〈中音〉は、あるまじった感慨を表現する時に使われる、韻律文的なものから散文的なものまで幅広く扱うことのできる曲節である。

【中音】

雪は野原を埋めども 老たる馬ぞ道は知ると云ためし有とて
 白あし毛なる老馬に 鏡鞍置 白轡はげ 手綱結んで打掛
 先に追ッ立て はまだ知らぬ深山へこそ 入たまへ。



【中音】

桜は咲て七ヶ日に散を 名残をおしみ 天照御神に祈り申されければにや
 三七日まで 名残あり 中ユリ けり
 君も賢王にてましませば 神も神徳を 耀かし
 花もころろありければ 久しくよはひを 保けり

右に挙げた例のように、「あるまとまりを持った韻律文的な文章」の前半部分を、小部分（文節的）で一息つような形で、一の声（リ一）、二ノ声（リつ）の順で、そして時には中ユリ（ユ一）が配置されるのが、（中音）の基本である。そして、この各文節末尾の二音字を発声する時には、（通例は声と琵琶を同時には演奏しないのだが）琵琶も、ほぼ同時にそれぞれ一ノ声の手、二ノ声の手、中ユリの手を弾くのである。
 ところが、「祇園精舎」の（中音）は、次のようになっていた。

【中音】

祇園精舎のかねのこゑ 諸行無常のひびき有り
沙羅雙樹の花の色 盛者必衰のこゝろをあらはす

「かねのこゑ」が二ノ声、「ひびき有り」が中ユリであるが、

②―1 最初の一節が一ノ声ではなく、二ノ声であること。

②―2 中ユリの墨譜が、通例は「ヨコ」だが、「ヨコ」と逆になっていること。

②―3 「ゑ」と「り」には墨譜(いかた)が付加されていること。

②―4 (譜本には明記されていないが、口伝として) 二ノ声、中ユリの琵琶の手は、この二音字の発音が終わってから弾くことになっている。

通常の平曲とは異なり、とりわけ莊重に語るようにとのねらいによる節付けの改変・付加と考えられる。

③ 平曲では、一句の中で、同じ曲節が連続することはない。ただし、〈初重〉だけは、例外的に連続することがある。その場合、二番目以降の〈初重〉を〈重初重〉と呼んでいる。しかし、例は少ない。

④ 〈位口説〉は、特別な(心構えを要求される)表現というべきだろう。具体的にはどのように譜本に表されているかと言えば、〈口説〉の墨譜の基本は「上止ま」であるのに対し、「祇園精舎」の〈位口説〉の墨譜は、さらに「ア」「ウ」「ヤ」が加わるのである。

位口説

近く本朝ヒトノミヤをうか、うに 承平ユキヘイの將門シヤウモン 天慶テンケイの純友ジュンユウ 康和ヤシロの義親ヨシチカ 平治ヘイジの信賴シノリ
 是等コトノトシは おごれる事コトも たけき心ココロも 皆みなとりくなりなりしかども
 まちかくは 六むはらの入道ニョウダウ 前まへの太政大臣タイサウヂヤウ 平へいの朝臣チヤウシ 清盛キヨシゲ公キミと

以上の四点が、『平家正節』の「祇園精舎」の特徴である。これらを着眼点として、他の平曲譜本の「祇園精舎」では、どのようなになっているのかの比較検討に進むことにする。

改めて、特徴をあげておく。

- ① 語り出しの曲節が〈中音〉であること。
- ② 〈中音〉を構成する小部分の一ノ声、二ノ声、中ユリの配分と表現に特徴があること。
 - ②—1 最初の一節が一ノ声ではなく、二ノ声であること。
 - ②—2 中ユリの墨譜が、通例は「ヨエ」だが、「ユエ」となっていること。
 - ②—3 「ヌ」と「リ」には墨譜が付加されていること。
 - ②—4 (譜本には明記されていないが口伝として) 二ノ声、中ユリの琵琶の手は、この二音字の発声が終わってから弾くことになっていること。
- ③ 〈初重〉—〈重初重〉—〈重初重〉と、同じ曲節が連続すること。
- ④ 〈口説〉も特別な〈位口説〉であること。

六 平曲譜本―諸本の「祇園精舎」

ここで検討する諸本を、改めて列挙する。

- あ 『小秘事』(山口県立山山口県立山)
- い 『平家吟譜』(宮崎文庫記念宮崎文庫記念館蔵平家物語)
- う 『平曲吟譜 灌頂卷』(青森県立青森県立図書館蔵)
- え 『秦野流 小秘事』(奥本奥本)
- お 『波多野流 小秘事』(京都府立総合資料館蔵)
- か 『平家物語』(早大、演劇早大、演劇博物館蔵)
- き 『平家正節』↑この譜本が検討の基点になっている。まぶし
- く 『平家物語 前田流』(昭和女子昭和女子大学蔵)

結果をそれぞれの譜本について記す。

- あ ①…〈中音〉で開始。②―1…二ノ声か。②―2…通例の中ユリ。②―3…付加あり。②―4…不明。
- い ③…曲節を重ねず、一つの〈初重〉で。④…通例の〈口説〉。※(補記)…この譜本は「…夢のことし。偏へに。風の前の。塵に同し。猛き人も。遂には滅ひぬ。遠く…」とテキストに混乱がある。
- い ①…〈中音〉で開始。②―1…一ノ声。②―2…通例の中ユリ。②―3…付加なし。②―4…不明。

う	い	あ	①	②—1	②—2	②—3	②—4	③	④
○	○	○		●	○	○	○	●	○
●	●	○		○	●	○	○	●	○
○	○	○		○	○	○	○	○	○
○	○	○		○	○	○	○	○	○
○	○	○		○	○	○	○	○	○

右を表示する。正節を○印にして、これと同様を○とし、違うものを●で表示した。

- ③…曲節を重ねず、一つの〈初重〉で。④…〈口トキくじき〉とあるが墨譜の種類は多い。
- ⑤ ①…〈中音〉で開始。②—1…一ノ声か。②—2…中ユリ。但し正節と同様。②—3…付加なし。②—4…不明。③…曲節を重ねず、一つの〈初重〉で。④…〈詢くじき〉とあるが墨譜の種類は多い。
- ⑥ ①…〈中音〉で開始。②—1…一ノ声。②—2ノ声。②—3…付加なし。②—4…不明。③…曲節を重ねず、一つの〈初重〉で。但し、「遠く異朝を…」から。④…通例の〈口説くじき〉。
- ⑦ ①…〈中音〉で開始。②—1…一ノ声。②—2ノ声。②—3…付加なし。②—4…不明。③…曲節を重ねず、一つの〈初重〉で。但し、「遠く異朝を…」から。④…通例の〈クトキくじき〉。
- ⑧ (始めから「…天下のみだれん事をも悟ら」まで譜記がある)
- ⑨ ①…〈中音〉で開始。②—1…一ノ声。②—2…中ユリ。但し正節と同様。②—3…付加なし。②—4…不明。③…不明。④…不明。
- ⑩ ①…〈中音〉で開始。②—1…一ノ声。②—2…中ユリ。②—3…付加なし。②—4…不明。③…曲節を重ねず、一つの〈初重〉で。④…〈口くじき〉とあるが墨譜の種類は多い。

以上の平曲譜本の比較から得られることがらを記す。

七 考察メモ

く	き	か	お	え
○	○	○	○	○
●	○	●	●	●
●	○	○	●	●
●	○	●	●	●
?	○	?	?	?
●	○	○	●	●
○	○	?	●	●

01 〈中音〉から始まるのは、流派の別、譜本の新旧を問わず共通である。

02 〈初重〉を三つに分けて〈初重〉―〈重初重〉―〈重初重〉とするのは、正節だけのようである。正節独自の処理と言えるか。

03 前掲対照表の⑥⑦を〈初重〉で扱うのが大半だが、波多野流の（奥村に従えば）後代的な譜本では、⑥は最初の〈中音〉の中に含まれ、⑦から〈初重〉である。……波多野流は、本文の形・内容に、他譜本よりも密着していると言えるだろう。

04 冒頭の〈中音〉に関して。一ノ声、二ノ声、中ユリの扱い方に、違いがあることがわかる。この違いは、流派による違いとは言えない。新旧に関わるのではなからうか。

05 〈口説〉か〈位口説〉かという名称については、正節だけが独自の名称を立てていることになる。しかし、墨譜で判断すると、〈位口説〉的なものと通常の〈口説〉とに分かれるようである。〈位口説〉ないし〈位口説〉的なものは、後代的と言えるだろう。

八 おわりに

本稿は「祇園精舎」が「小秘事」という秘曲の扱いになっていることについて、ことばと音楽の二つの観点から検討した。広本系のテキストと略本系のテキストの違いについて、音楽的な要因を考えることができなかつたのは遺憾だが、今日に至るまで伝わっている〈語り〉は、古い段階を探りうるところでは、テキストとしてほぼ固定していたというべきであろう。

音楽的な側面については、『平家正節』と現存の平曲をもとにして問題点を探り、他の平曲譜本を照合するという方法をとつたのである。その結果、「祇園精舎」の〈語り〉を曲節の構成（組み合わせ）という観点で見ると、古い段階の譜本でも、揃って〈中音〉を語りだしとする点では、古くから特別な曲節の構成で語られるものであった。しかし、古い段階の「祇園精舎」の〈中音〉は、一般の平曲と同様の〈中音〉であり、節回しに特別のものを認めることはできなかつた。「祇園精舎」の〈中音〉の特別な性格（秘曲性）は、平曲譜本をもとにした歴史的な把握で言えば、新しい段階の譜本になって、曲節の内部を変化させるようになったのである。

もう一度言い直せば、「祇園精舎」が〈小秘事〉と扱われることには、もともとは「祇園精舎」の文章の内容・格調に関わつたことであつた。「祇園精舎」の〈語り〉の節回しそのものに秘伝的な要素はなかつたのだが、後に、細部に音楽的に複雑なものを加えるようになったのである。

注1 記事量の多い少ないによって諸本を分類する「広本」「略本」の呼称は、平家物語諸本の検討に有効かどうか議論は尽くされていないようだが、私は、少なくとも「祇園精舎」のテキストが、大きくみて二種に分かれると判断したので、便宜的にこの呼称を用いた。このことによって諸本系統論や古態論に進もうというのではない。

注2 但し、八坂系本文は、このv部分の人名列挙は広本系と同様。広本系と略本系との中間的な形である。

注3 成立時期については藤原定家書写『平兵部卿記』紙背文書、語りの開始時期については、『普通唱導集』の記事を参考にした。

注4 ①の『平家吟譜』と、その次にあげた②『平家吟譜』との関係は紛らわしいが、③は外題内題ともに「平家物語」とある譜本を『平家吟譜』と判定したものであり、④『平家吟譜』の原稿的な位置を占めるものであろう。厳密に言えば、『平家吟譜』の書名をもつ譜本の完本は、現在見つかっていない。

付記 本稿は、人文学部「表現文化研究会」（二〇〇九年一月三十日）における口頭発表、および日本学術振興会科研費・基盤研究（C）「京都当道座奥村家関連資料の総合的研究」による研究会（二〇〇九年二月十九日）における口頭発表に基づいている。佐々木充氏、高木裕氏、駒形千夏氏、楊夫高氏、岡田三津子氏、櫻井陽子氏より御意見を頂戴した。深謝の意を表する。また、本稿は平成二十年日本学術振興会科研費・基盤研究（C）「平曲伝承資料の基礎的研究」による成果の一部でもある。

山口県立山口図書館蔵『小秘事』

この書については、既に奥村三雄の紹介検討がある。

・「山口県立図書館本『小秘事』」（『平曲譜本の研究』一九八一年。桜楓社）

・「平曲の小秘事―山口県立図書館本を中心に―」（九州大学「文學研究」第八十輯。一九八三年二月）
 ・「波多野流古譜本―山口本小秘事を中心に―」（『波多野流平曲譜本の研究 付奏音曲鈔影印本』一九八六年。勉誠社）
 この書は、奥村が影印で刊行紹介した山口図書館の『秦音曲鈔』のツレになる譜本と考えられるのだが、奥村はこの書の重要性に言及しながらも、なぜか影印本に収めなかった。ここに平曲譜本の「小秘事」の重要資料として影印で紹介したい。

本紹介に関して山口県立山口図書館より許可をいただいたことを明記し、謝意を表する。

書誌 「小秘事（しようひじ）」写本一冊。配架番号ナシ。

表紙 紺色。工字崩し・雷文繋ぎ・七宝の菱繋ぎ文様（押型）。

外題 「小秘事 全」（表紙中央に題簽。銀箔散らし）。

内題 「延喜聖帝 祇園精舎」（扉題）。

料紙 斐紙。

装幀 袋綴。

表紙寸法 縦二六、〇糎 横一九、〇糎。

本文 全十一丁。

漢字ひらかな交じり六行。曲節の名、墨譜あり。本文関係墨譜関係の朱筆書き入れあり。本文と同筆か。

蔵書印 「防陽／多賀宮／文庫」「多賀大宮司」「印文不明」…いずれも朱印。

「陽」（黒丸印）。

備考 表紙右肩に「文化八年校割帳御改之外」(印刷)の紙片貼付。
扉の左下に「豊田檢校」と墨書。末尾に「武勳豊田檢校傳之」と墨書。

朱書の箇所

- 二オ (2行目左) ∷ △ ○延喜の帝とも申すトモ △ (左側の墨譜は黒)
(2行目左) ∷ 皇シ
- 二ウ (1行目左) ∷ イ (右側の墨譜も朱)
(4行目左) ∷ 下されきトモ △
- 三オ (1行目左) ∷ 「歳十三にて父」の左側の墨譜
(5行目右) ∷ 強吟替
- 三ウ (2行目右) ∷ 本四ユリ
(3行目右) ∷ 同(こども「本四ユリ」の意であろう)
(4行目左) ∷ 「怪力の災もなく」の左側の墨譜
(4、5行目左) ∷ 「愁をきかさりき」の左側の墨譜
- 四オ (5行目右) ∷ 吟替
(5行目右) ∷ 強
- 八オ (4行目右) ∷ 初重
(5行目右) ∷ 柔入

八ウ (2行目右) ∷ 吟替

(2行目右) ∷ 強

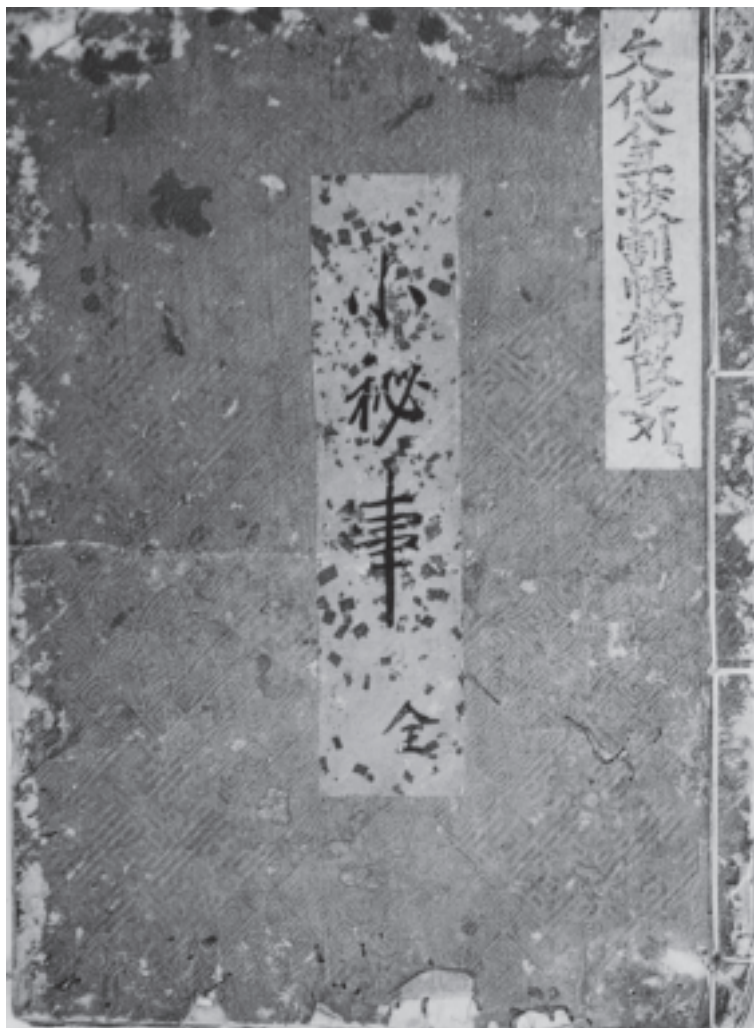
(2行目右) ∷ 柔

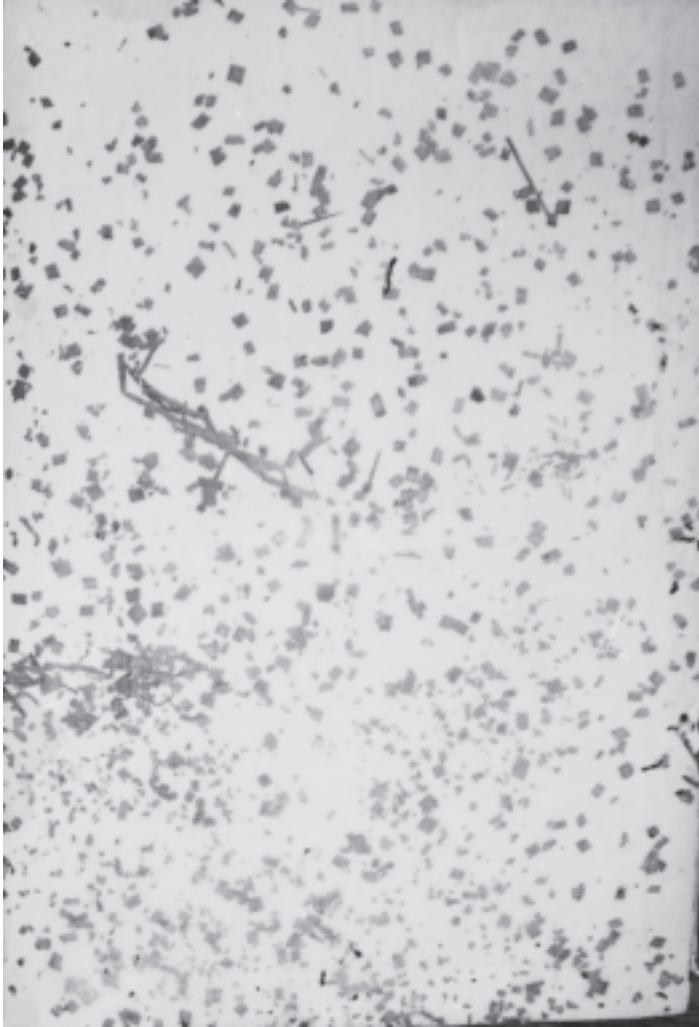
九ウ (2行目右) ∷ 本四ユリ

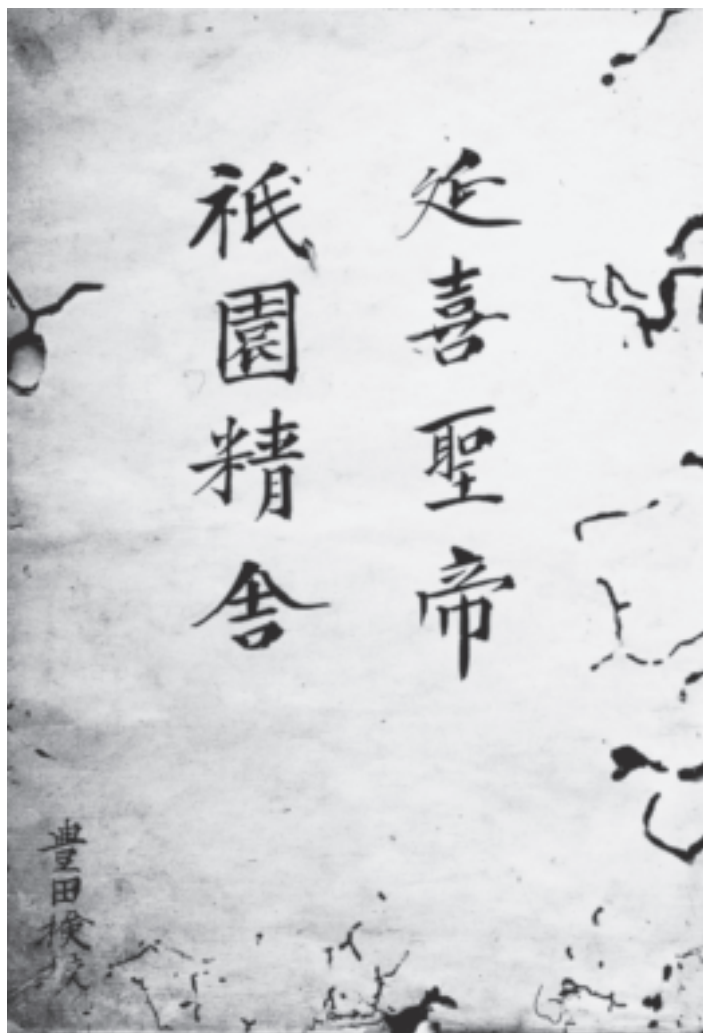
(2行目右) ∷ 同

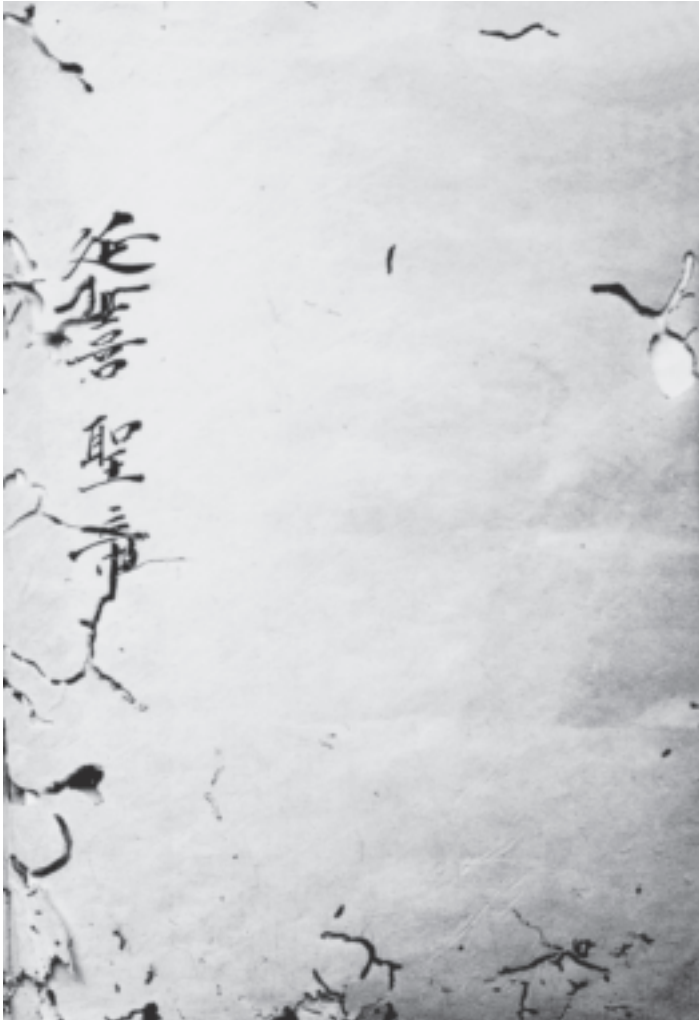
(4行目左) ∷ ○平の○(右側の墨譜も朱)

◎祇園精舎語りの秘曲性









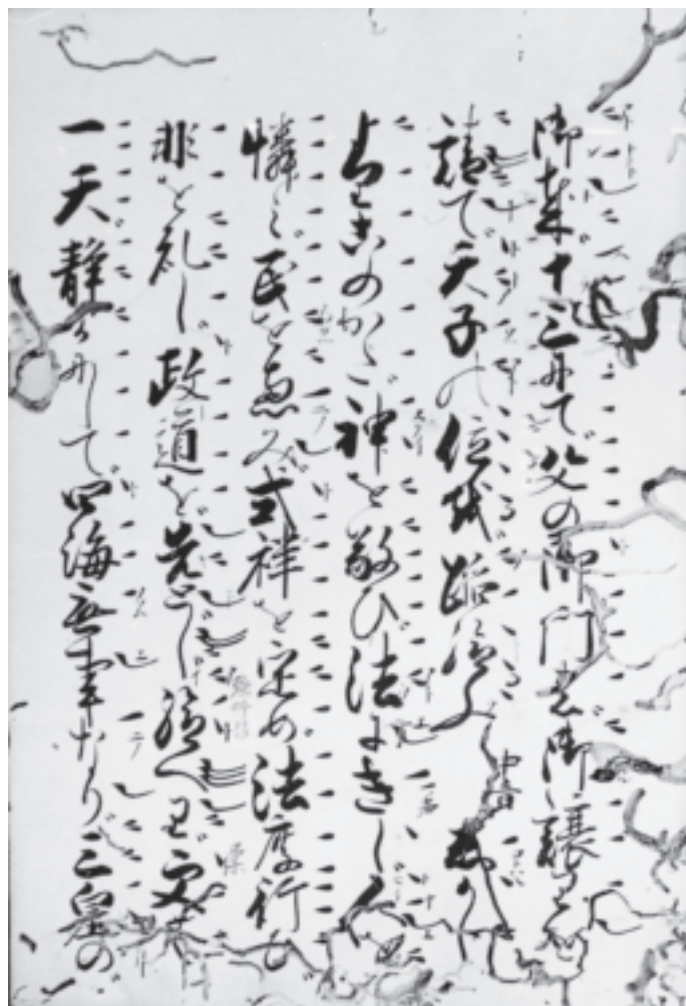
(一七)

中書
日本親尉の醍醐の天皇とて聖帝
仰しくたげ多れ法皇の弟の御子
御母の勸修寺の御子隆藤公の御孫
志やきやの教の女御とてたに
元慶九年二月一日の日王子は
生中多分法皇の侍とてま侍候

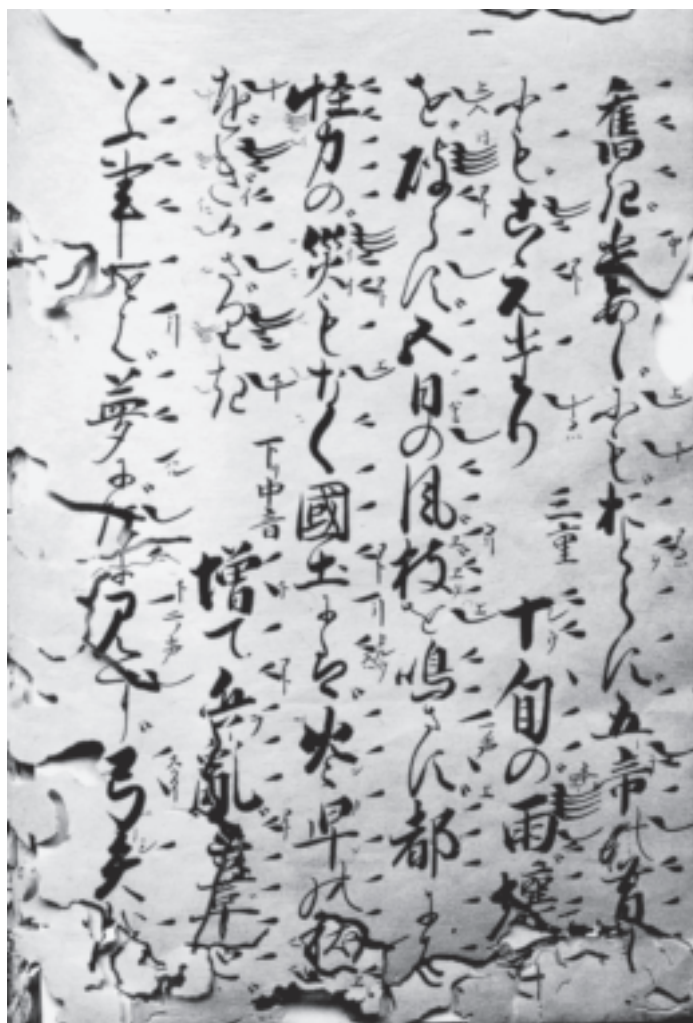
(二才)

皇
 座より大ねむ付の人王侍従（九）の
 王侍従（五）より命をひかりし寛平元年
 十二月七日の日所子五歳（六）なりて親を
 宣旨（七）に蒙り賜ふ日（八）も五年七月二十
 九日所子九歳（九）なりて皇太子（一〇）と
 賜ふ日（一一）九年十月（一二）八日（一三）の日所子

(二七)



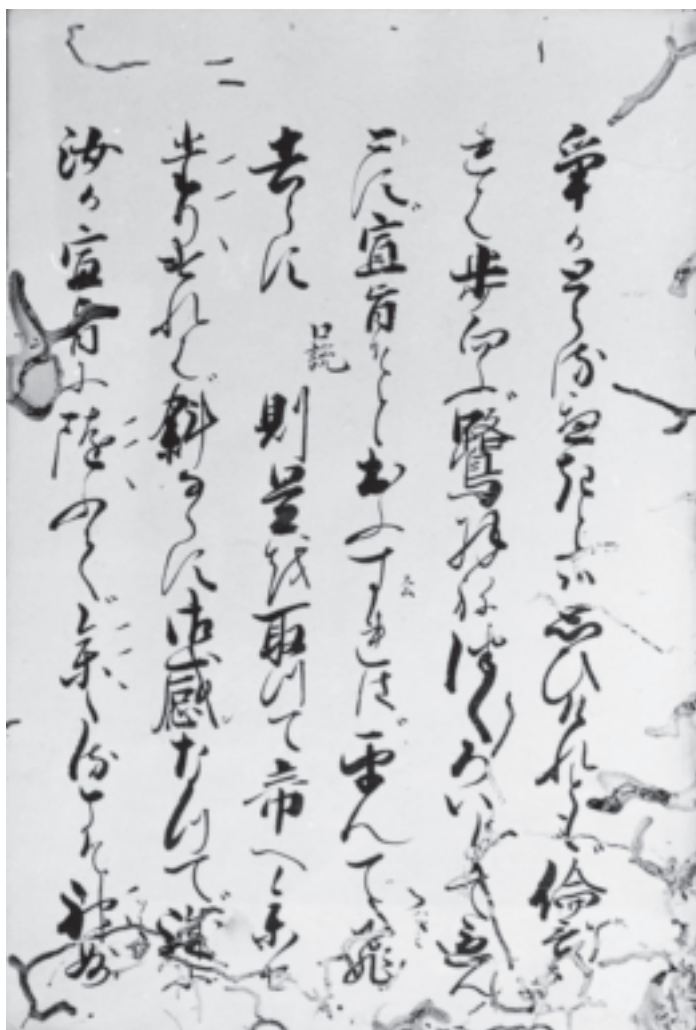
(三才)



(三七)

我も美衣を皇市園との民も
いふ言の後とも我の願ひして地
を胎せ座もまた中比は喜み帝
神泉光へ行幸なりして少遊有
池の水際よ磬の在たりけり
とておの磬よ好てしよれに

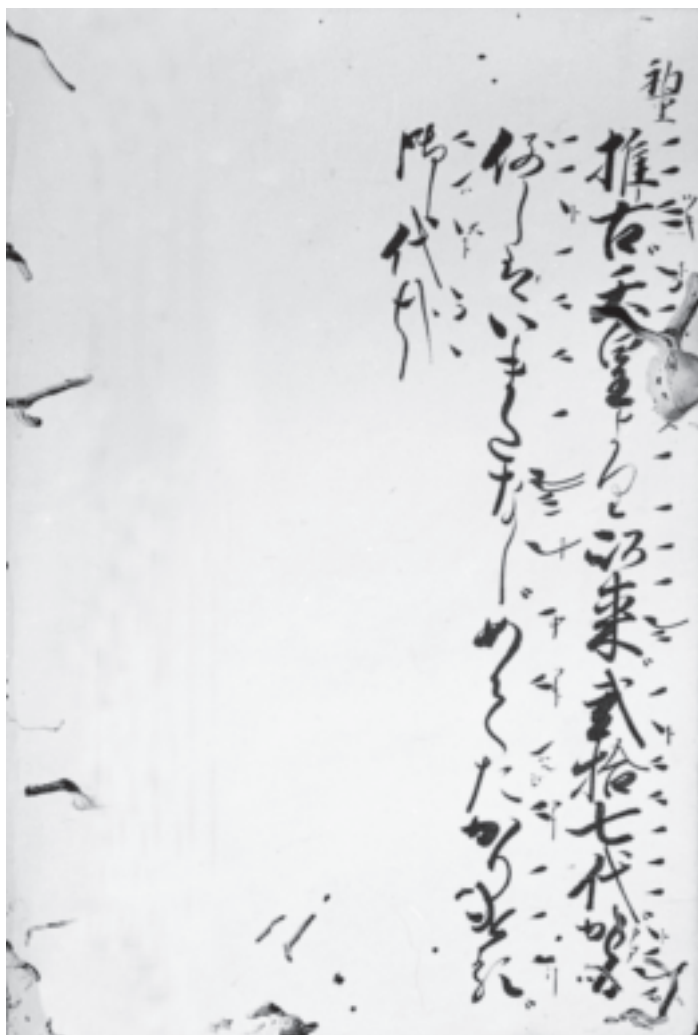
(四六)



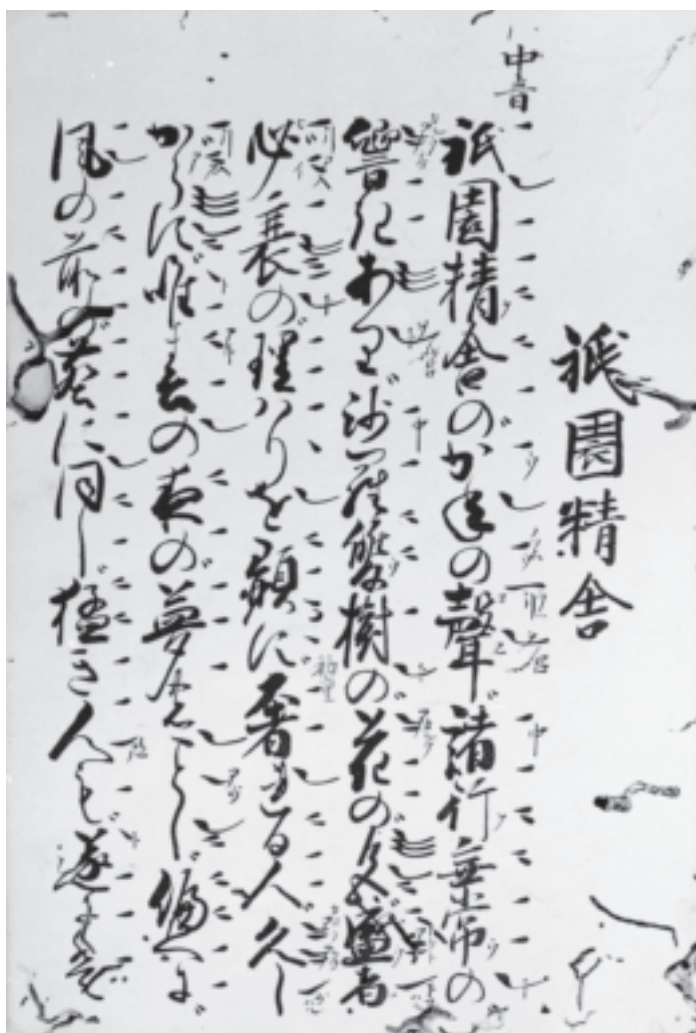
(五才)

二
一人出の事一報〜八六宮陸路
百司備の事〜
常之祥泉小野の行幸は誠
川の御幸ありと金くはさるる遊所
桶を降つてありたありに清玉七道
の人を召准りて天帝と達せし事

(六才)



(十七)



(八才)

口説
と家少は義平の將門天慶の純友
康和の義親平治の信賴是等も修治
れずとも極つてなほと留るるもかりし
かゝしる遠くはなはれの入道前のおぬ
大臣平は朝臣は盛なりし人の有るが

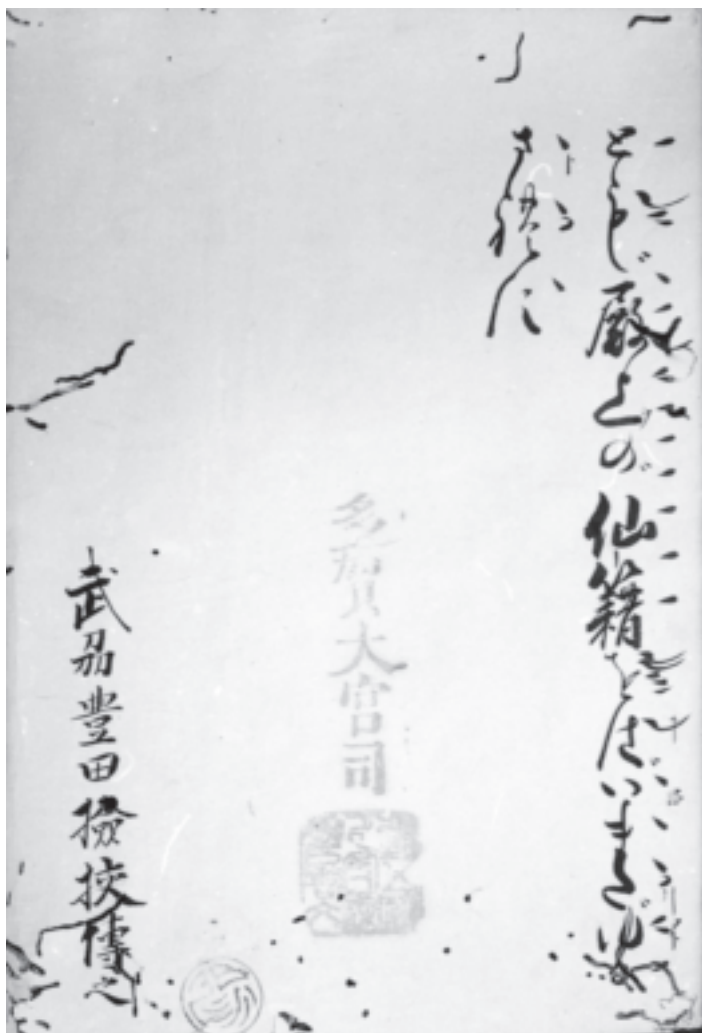
(九才)

一ノ下
 三ノ重
 其先祖は守りきく相氏天皇御孫の
 皇子一品式部卿菅原の親王九代
 後龍 下中音 護の守正區 孫刑部
 卿忠盛の叙長嫡男一人は親王と
 仲子高親の王無官位にして史

〔九之〕

おののけりもさる程の王の侍始て平権
と備なりて上總の今がりも強ひり
以来忽ちふ玉氏と名て人臣小津
たれ 聖 其子鎮守府の將軍義茂
後より國を改じ國者よらとて下
至るまで六代を請ふの受領たり

(十才)

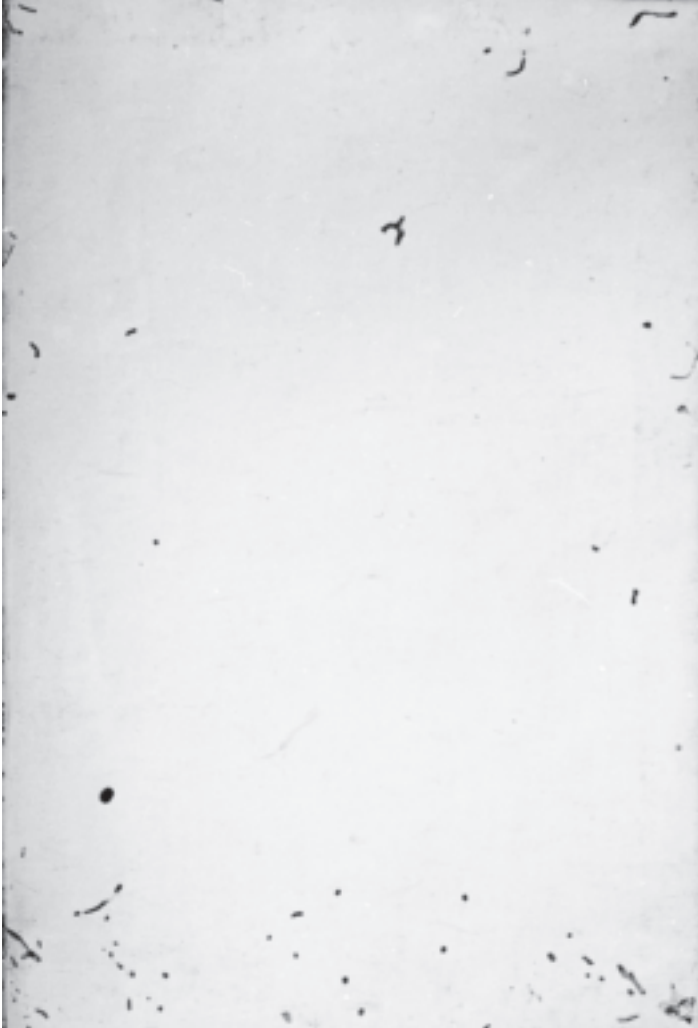


〔十之〕

◎祇園精舎語りの秘曲性



(十一才)



(十一文)

◎祇園精舎語りの秘曲性

